に依つて建設せられたと云う事が今日ではエトルスキ学上の常識となりつつあるのである。又宗教史に於いてもエトルスキ的なデーモンの世界支配の思想が前一世紀に Lucrèce が De Rerum Natura を著わす迄ローマ人の宗教意識に大きな影響を及ぼしていた事が明らかにされたのである。更に芸術の面に於いても今迄エトルスキ芸術の最後の製作は前一世紀に置かれていたが、その多くのあるものが époque constantinienne 迄降ることが証明された。(M. Ragna Enking, Datierung und Matine der spätetruskischen Kunst, Jahrbuch des deutschen arch. Instituts, 63〜64 an. 1948—1949, col 183 à 237)

かくしてエトルスキ芸術の影響はローマによる征服及び政治的統一の後にも尚イタリアの地に存続したことに対し我々は改めてエトルスキ文明の強大性に就いて深き反省をなす必要があるであろう。

以上が本論文の大体の内容紹介であるが最後に私の読後感を述べさせて戴くならばこれは確かにエトルスキ学の現況を知るには極めて要を得た論文である。しかし Raymond Bloch が仏訳した Pallottino の著書には Bloch が支持する東方説を遂次批判しているのである。この小論文をもつてしては到底不可能であろうが他日彼の Pallottino の批判を知らんと欲するのは私一人ではないであろう。Pallottino 的な土著説に Bloch 的東方説が最も対立的な見解であるとするならば今後のエトルスキ史学の鍵の一つは civilisation villanovienne から civilisation étrusque への転換を Pallottino の如くに内部的な連続的発展と見るか或は Bloch の如くに外的変革と見るかに依つてエトルスキ人の起源論が決定されるであろう。尚一応お記しておかなければならぬ事はこの紹介は時間的に余裕がなく非常な狼狽のうちに出来上つたものなる故に大きな誤読或は曲解を犯していはせぬかと恐れるのである読者諸氏の批判を期待する次第である。

——浅香　正——

小林行雄著
日本考古学概説

日本考古学は近年著しい進歩を遂げて来た。しかしながら、その成果が、必ずしも一般によく知られ、利用されているとは言えない。その原因の一つとしては、戦争中から戦後に亙る困難な事情のために、学術的に重要な発掘が行われても、その報告書の出版は遅れがちであることが挙げられよう。これとともに、著しく拡大された知識を、適確にまとめ上げた概説書が殆ど現われなかつたことも、先づ指摘されねばならぬであろう。この後者の要望に答えうるものとして、本書の持つ意義は大きく評価されねばならない。

次に注意されねばならぬのは、その「はしがき」にも述べられているように、遺物の記述に力を用いていた過去の概説書とは異つた行き方の採用である。即ち「遺物研究の学問から人類の過去を研究する学問への方向に、より近づけよう」とする企てであつて、これは広義の歴史学の一分野として考古学を意識する場合、当然の方向と言わねばならぬ。

かかる方向の下に、繩文式・彌生式・古墳の三時代の概説が進められるわけであるが、その記述に当つては、「序章において各時代の総説を三者の対比のうちに進め、住居・生

活・服飾・工芸・土器・習俗・葬制などの共通した問題を各時代ごとに概観し、縄文式時代においては人種論を、弥生式時代においては文化伝播の問題を、古墳時代においては実年代の決定法を、それぞれ考古学上の重要な主題として紹介するとともに、これを以てそれぞれの時代の結論とし、またつぎの時代への前奏としての意味をもたせることに意を用いた」とされている。

このような構成に従う記述によつて、三時代の相互の関係や、それぞれの文化の内容・特徴は明瞭に説明されている。しかしながらかかる構成は、一方においては、各時代内における文化の発展という面の理解を困難にした点がないとは言えない。具体的に言えば、縄文式時代は五期に、弥生式及び古墳時代はそれぞれ三期に細分されているのであるが、その各期の内容の説明が、必要に応じて各所に分散して記述されている結果を来している。それ故に、初学のものにとつては、各期の具体的な内容や意味がやや把握し難い点が生ずると思われる。このことは、文化内容の複雑な古墳時代において特に感じられるところであり、その三期の区分について、もう少しはつきりした規定が下されたかつた。

上述せる企図に従いつつ、一方、「考古学によつて明らかにしうる限度を超えない日本古代史」という制限を厳しく守りながら筆を進めて行くことの難しさは十分に理解出来るところである。この困難な課題は、豊富にして正確なる資料を自己のものとし、そこに含まれている種々の問題を根柢から再考察し、簡潔に整理し、まとめ上げた著書の手腕によつて十分に果されている。この見事な整理の結果として、日本考古学の現段階の明確な知識と、将来への展望はあますところなく読者に示されているのである。従つて、本書にむつかしさというものがあるとすれば、それは先ず第一に考古学そのもののむつかしさに起因するものと言えよう。遺物遺蹟を手がかりとして、人類の足跡を追うことは、決して容易な仕事でないことを反省せねばならない。又、本書の内容が、あまりにも多くの知識と問題とを圧縮した形で盛り込んだがために、初学者にむつかし過ぎると言うのであるならば、註の中に適切に選らばれている文献が理解を助けることが出来よう。考古学の著書においては挿図の果す重要な役割りはこに説明するまでもないであろう。

本書は正確な実測図を主体とする挿図が極めて豊富であり、その点においては殆ど遺憾がないと言えるのみならず、実測図の在り方に関しても示唆を受けることが出来よう。ただ本の大きさの関係から、やや縮少が過ぎて、文様の細部などに不明瞭な点が生じたものがあるのは非常に惜しまれる。又、拓本による鏡の図の不明瞭さについては、一考の余地があろう。巻頭の写真も、数の少なすぎるうらみはあるが、これは普及を目指した本書の性格上、止むを得ないものと考えねばなるまい。

いずれにしても、日本考古学の正確な知識を得ようとする人々、日本考古学をこれから研究しようとする人々にとつて、本書がもつとも信頼の出来る道標としての役目を十分に果すものであることを記して、つたない紹介を終りたいと思う。（一九五一年一二月発行、創元選書、B6三二〇頁、図版八頁、挿図六七、二九〇円）

――藤沢長治――